

資源とは、国語辞書で調べてみると「人間の生活や産業などの諸活動において利用可能なものこと。狭義には自然から得ることができる原材料のことを指す」とある。

オーストラリアの鉱物、エネルギー資源がなかったら、今日の日本は存在しなかった。太平洋戦争の敗戦で荒廃した日本は、奇跡的に復興し高度成長を達成して、世界第2の経済大国になった。このことはオーストラリアなしでは語れない。そして今日、中国、韓国、インドをはじめアジア諸国の経済発展は目を見張る勢いである。これらの国々による資源需要が急激に拡大し、資源大国オーストラリアに対して強力なアプローチをかけている。このような現況下、日本の資源確保がますます厳しくなる。これからの資源争奪戦をいかに戦い抜いていくか、国運の将来に大きな影響を及ぼす。これからも日本が生き残り、発展するためにはこのオーストラリアの資源に依存しなくてはならない。

国民生活、産業活動の基礎になるエネルギーは電力である。電気がなければ現代人は、生きていけない。東日本大震災の影響で、東京電力の福島原発の事故が発生した。その結果、電力供給不足が露呈、関東圏には計画停電が実施され、産業や住民の日常生活に多大な影響を及ぼした。このように国の産業、国民生活のエネルギー源である電力供給に問題が生じると、ネガティブな国家的影響が避けられなくなる。国にとって電力がいかに重要で、大きな役割を担っていることかあらためて認識を深めた。この電気を起こすためには、エネルギー源が必要である。これからの太陽光、風力、バイオマスなどの代替エネルギーは

別として、現在の主流は石炭、天然ガス、ウランである。これらを燃やすことによりエネルギーを得て、タービンを動かし電力を作り出している。日本はこれらのエネルギー資源の多くをオーストラリアに依存している。

日本は国際的に競争できる資源がないので資源を輸入し、それを加工して、その製品を輸出し発展してきた。原料は製品を作る上で不可欠である。原料は形を変えて、経済活動、社会生活に役立つている。豪州からは原料の輸入が主で、一般の人びとはその重要性に気が付かない。食品分野では原料、原産地の表示があるが、他の分野では表示されないので、日本で作られている工業製品の原料は何で、その出所がどこかわからない。

たとえば、道路、橋梁、船舶、鉄道、建物、自動車、機械、家電製品などに広く使われている鉄鋼や非鉄金属について、その原料は、鉄鉱石であり、石炭であり、金、銀、銅、亜鉛、アルミなどである。また、140兆円の日本のハイテク産業を支えているレアメタル（希少金属）の主なもの、チタン、リチウム、ニッケル、コバルト、マンガン、モリブデン、インジウム、タンタル、ジルコンなどである。これらの原料の主たる供給国は、オーストラリアである。これらの資源が製造工程で処理され、形を変えて、製品になる。だからその製品の原料が何で、どこから来ているのか関係者以外にはあまり知られていない。

またオーストラリアは、自給率40%の日本にとって絶対不可欠な食料供給国である。安全、安心の食料は、国民の健康に直結している。ほとんどの食品の原料が、オーストラリアから来ている。粉の原料は、小麦が主である。各種プロセス・チーズの原料は、ナチュラル・チーズで、乳酸飲料・アイスクリームなどの原料は、粉乳などである。ビールやウイスキーなどの原料は、大麦である。これらの原料は、オース

トラリア産である。砂糖や塩は、日常の食生活に必要な不可欠である。日本はほとんど輸入に頼っている。その多くをオーストラリアから輸入している。オーストラリアは、砂糖の原料である粗糖を60年の長きにわたり日本に安定的に供給している。

背広、コート、服装の原料は繊維である。その重要な部分を羊毛が果たしている。オーストラリアは、羊の背中に乗って発展した羊毛大国といわれた。世界の大半の羊毛、特に繊維の細い高級羊毛は、オーストラリア産で、世界最大の供給国である。また、もうひとつの天然繊維である綿も日本は全量輸入している。ここにもオーストラリアが関係している。毎日なんとなく使っている紙、ティッシュの原料は木材で、それがチップにされ、煮沸され、幾多の過程を経て製品になる。チップは、オーストラリアから大量に輸入されている。住宅、建物、乗りもの、ビン、グラスなどに多用されているガラスの原料は、珪砂（シリカサンド）で、オーストラリアが過去50年にわたって大量に供給している。このようにオーストラリアは、日本のエネルギー、重要な産業、身近な社会生活を支えているのである。オーストラリアが日本の国民生活、産業の生命線で、今までもこれからもその重要性は、さらに増すことはあつても軽減することはない。

国力の維持発展のためには、食料、鉱物資源、エネルギー資源の確保が至上政策である日本にとって、オーストラリアはこの地球上における最も重要なパートナーであるのみならず、産業と国民生活の防衛隊なのである。だから、これからも日本が存在し、繁栄していくためには、オーストラリアは欠くことのできない国である。アジア諸国の経済発展を踏まえ、今後の資源確保がますます重要かつ厳しさを増している今日、今一度オーストラリアとの関係を詳しく検証し、真摯に再構築する時期に来ている。日本の未来は、オーストラリア抜きでは語れない。

オーストラリアに関しての知名度は、近年向上した。年間約40万人の日本人がビジネス、留学、交流、観光目的などでオーストラリアを訪問している。しかし、オーストラリアの社会、その仕組みなど細部、深部についてはいまだによく知られていない。重要度を増す日豪関係をさらに発展させ、構築するためにオーストラリアという国をもっと知らねばならない。全体的な把握、理解のためには拙著『豪州読本』（大学教育出版 2011年）を一読されれば、豪州の事情が大変よくわかる。歴史、国民性、社会通念、気候風土、政治、法律、経済、産業、社会保障、医療、教育、言葉、ライフスタイル、社会生活全般、多民族多文化主義、先住民、日豪関係などが詳しく紹介してある。

今回の第二作目は、それから一步進めて、世界特にアジア地域において現在急速に進行している変化に鑑みて、オーストラリアが日本にとって今なぜそんなに重要であるのか、その背景と現実について解説し、日本が将来生き延びていくための戦略的互惠関係を再構築する必要性と、その緊急性を中心に展開する。最後に日豪関係についての考察と警鐘を発信してこの書籍を閉じる。なお、付記としてオーストラリアでのビジネスチャンスの具体例を紹介する。

2012年7月

田中豊裕

資源争奪戦時代

—なぜ今オーストラリアか?—

目次

まえがき

プロローグ オーストラリアの両親を偲んで

第一章 今日の日本があるのは

一、日豪初めての邂逅から 9

二、戦後日本経済の発展は、オーストラリアなくしては語れない 12

三、高度成長と国民生活を支えた資源 15

四、日本の食卓を賑わすオーストラリア 18

第二章 日本の国運を左右する資源の確保

一、国の根幹であるエネルギー資源 24

二、産業を支える鉱物資源 33

三、ハイテクに欠かせないレアメタル 46

四、国民生活を守る食料資源 67

五、その他の重要資源 104

第二章 日本は、豪州資源争奪戦に勝ち残れるのか 112

一、アジア諸国との資源争奪戦 113

二、日本の投資と今後の課題 129

三、オーストラリアの外資導入 134

第四章 完熟した補完・互恵関係 139

一、高度に補完的な日豪関係 139

二、その将来——進化した協力関係 144

三、日豪の新しい協働関係の構築 147

第五章 日豪自由貿易協定の消息……………150

- 一、互恵メリット 151
- 二、争点——日本の農産物市場の開放がキー 154
- 三、アジア諸国とのパーセーブ 160

第六章 外交、安全保障でのパートナーシップ……………164

- 一、両国の安全保障、その背景 165
- 二、アメリカの傘 167
- 三、日豪の安全保障協力 169
- 四、アジア地域で日豪が果たす役割 173

第七章 警鐘——日豪関係の将来……………176

- 一、日本は東、豪州は北向き 177
- 二、政・官・民の意識改革 178

三、メディアの役割	182
四、人材、後継者育成	186
五、交流の進化と将来への期待と懸念	191
六、一蓮托生 これぞ究極の日豪関係	194

あとがき	199
------	-----

付記 オーストラリアのビジネスチャンス	202
---------------------	-----

一、ウナギがいるよ——第一次産業	203
二、アルミ製品が当たり——製造業	209
三、学生寮でひと儲け——サービス産業	213

参考文献一覧	222
--------	-----